
暗がりバレンタイン

朝倉智行

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗がりバレンタイン

【Nコード】

N3252R

【作者名】

朝倉智行

【あらすじ】

つい先日 of 交通事故で視力を大きく失い、そのまま入院生活を送っている彼女。入院中は何かと暇だろうと決め付け、毎日のように見舞いに行く俺。そんな二人にもバレンタインの日が近づいていたけど、彼女の状態も状態なので今年のチョコは諦めていた。（縦読み推奨です）

- 1 (前書き)

去年に書いていたものを発掘したので載せてみる。縦読み推奨です。

『真希さんは、事故の影響で視力を大きく失ってしまいました』

医師が俺にそう宣告してから今日で二週間。つまり恋人の真希が交通事故に遭ったのは二週間前の事だった。クリスマス、冬休み、元旦と冬の目白押しイベントが過ぎ去り、どことなく退屈気分が漂う一月末の通学路。降り続いた雪が残る横断歩道を歩いていた真希は、信号を無視して交差点に進入してきた車と接触。その際に頭を強く打ちつけたのが視力を失う原因だった。

ただし、完全に失明したわけではない。医者いわく『失明ではないものの、世界が濃い霧に包まれているような感じ』との話で、多少は物を把握することができるといふ。それでも、真希が中途障害者になった今、これからの人生にどれ程の影響を与え、そして何を失うのだろうか。俺には分からない。

しかし、真希が生きていること自体がそもそも奇跡だったりもする。事故の際に頭を打ったものの、積もった雪がクッションになり、命に別条は無いどころか軽い打撲が数か所程度で済んだのである。入院して二週間も経ってみれば、外傷も全て癒えて、念の為程度の検査を幾つかこなすのみにまで落ち着いていた。面会も可能になり、俺は今日もお見舞いに向かうのだった。

その日もいつも通りのお見舞いだった。

巷で話題の異常気象が原因なのか、それとも天気を司る神様の気まぐれなのか分からないが、今年の寒さっていうのは本当に半端じゃない。去年、真希とのクリスマスデート中に待望の初雪が観測され——ホワイトクリスマス万歳！と神に感謝したのが運の尽きだったのだろうか。その初雪から、今日に至る二月の真ん中辺りまで雪が降り続けているのだから、季節感や有り難味なんぞ通り越して、もはや寒くて億劫としか感じられなくなっている。人間とは、何て身勝手な生き物なのだろう。

しかし、人間がチンパンジーぐらいの小猿から徐々に進化して環境に適応していったのなら、現代日本人は、もう少し寒さへの耐性をつけるべく進化する必要があるのではないのだろうか。それが可能なら、わざわざ寒空に出るための冬着を用意することもなく、しかも季節ごとに行う洋服棚の整理もやらなくていい。これは素晴らしいぞ。

……いや、だからと言って脂肪の厚さが二倍になったり、全身が毛深くなったりするのは嫌だな。それじゃゴリラと変わらん。だって空を自由に飛べる羽の方が便利かもな。これなら通学もラクラクだ。でも電線とかにひっかかって不便なんだろうな。夕方のテレビで——通学中に電線にひっかかって感電した高校生が……なんていうニュースが流れるのは勘弁願いたい。というわけで、俺は現代日本人らしく無難に冬用コートを着込んで今日も玄関を出た。

高校の部活に所属してなくて良かった——という意味不明な感情を俺が抱いたのは、真希が入院してからの話だった。何しろ病院は面会時間が夕方までとなっているので、放課後に部活をこなした後、病院に向かうのは時間的に厳しい。その点、帰宅部の俺は、家で制服から私服に着替え、どこかの店で差し入れを用意できるほどの時間的余裕もある。何しろ真希が入院している病院は、少し田舎の方にあるせいか近隣に店が無く、売店にもロクな物が置いてないので、「なかなか甘いものが食べられないよ」

と、見舞いに行く度に本人が嘆いている。きっと入院生活だと食べることぐらいいしか楽しみがないんだろな、という変な思い込みをしつつ、いつの間にか差し入れとして甘いものを買っていくのが見舞いのテンプレートになっていた。幸いにも自宅から徒歩数分という位置に小さいスーパーがあるので、だいたいはそこで買い物を済ませる。

とりあえず甘いものが食いたいと本人が言っていたので、安全牌と言えるケーキをチョイス。プラスチックのパックに入ったモンブランにすることにした。出来るならケーキ屋さんの美味しいケーキを差し入れたいところだが、そんなことを週に何度もやれるほど学生は金が無い。一回きりのお見舞いならともかく、日常的になっている差し入れとしてはこれで十分だろう。

そのまま会計を済ませ、スーパーの袋を手提げたまま電車に乗り込む。病院最寄りの駅までは十五分ぐらい揺られる必要がある。立ちっぱなしは足がしんどいので、できるなら座席に座りたいのだが、この時間は帰宅する学生グループが座席を占拠しているため、俺は大概にして扉の横にある手すりに掴まって辛抱する。けど、ビニール袋を提げた自分の姿が窓の反射で見えたときは、スーパーの値引き弁当片手に電車で帰宅する大人の未来が見えたようで嫌だっ

たな。でも何回かお見舞いに行っているうちに、いつの間にかどうも思わなくなつたのは人間の慣れというやつなのだろうか。こんな感じで俺の体から若さという成分が徐々に失われていくのなら、実にうらめしい。

そんなこんなで目当ての駅に到着。時間的には余裕があるものの、陽が傾き始めたのを見て、俺は少し早歩きで病院まで向かった。駅から病院まで歩いて十分。清潔感と消毒液の匂いが充満している一階ロビーから、三階にある真希の病室まで二分。ようやく俺のお見舞いがスタートする。

(……？今日は元気が無いような気がするな)

真希が入院している部屋は、一応四人部屋である。真希が入院した当初は他に患者がいたものの、全員二日ほどで退院してしまったので、今は真希の独占部屋となっている。その入院している張本人はどうなのかというと、もともと軽症だった事故の傷も、とくに癒え、後は簡単な検査とリハビリを残すのみ。入院生活は予想以上に退屈だと俺に愚痴をこぼす毎日である。そんな真希の愚痴を聞いたもんだから——コイツは、俺という暇つぶしの道具がない時は何をしているんだろう、という好奇心が生まれるのは、ある意味で必然である。というわけで普通にお見舞いを進行する前に、病室の扉を少しだけ開けて真希の様子をうかがってみるのが俺の恒例儀式。つまり覗き見である。

ちなみに気づかれたことは一度も無い。そつと扉を開けて中を見るぐらいなら、俺の姿は視界に入らないようである。本人の視力が落ちていることを知っていて盗み見しているのだから悪い癖だな、とも思うが溢れる好奇心には勝てない。

そんなこんなで、いざ様子を覗き込むと、いつもいる窓際のベッドの上に真希はいた。

お気に入りと言っていた水色のパジャマ。入院してから少しだけ痩せたと言っていた割には変わらない、ややぽっちゃりとした体。少し髪が伸びたボブカット。事故の外傷も残らなかった大きい瞳も綺麗なままだ。見た感じ、いつも通りだが、その本人はどこを見るわけでもなく、ただボツと天井の方を眺めながら、小さなため息をついている。いつになくアンニュイな午後のようにだが、何かあったのだろうか。

「……はあゝ。私も……」

「……私も？」

「甘い物が食べたいなあ」

まさか、そんなシリアスな顔でその台詞が飛んでくると思わなかった。何か全身からコスモが抜けたかのように、そのまま横に俺の体が倒れてしまう。ついでに、扉に手をかけたままだったのでそのままガラガラと扉が横に開いた。ただし、ケーキは死守。

「きゃっ、だ……誰？」

「……おはよう真希。調子はどうだい？」

僕は、崩れた体勢のまま挨拶をする。

「ええっ？　んも、ビックリしたよ。とりあえず中に入ったら？」

ベッドをポンポンと叩いて——こっちにおいで、と誘ってきたので僕はそれに従った。

いつものようにベッドの空いているスペースにちょこんと腰をかけて、真希の右手をそつと握る。一応、ベッドの横には付き添い用の小さい椅子もあるんだけど、目が見えなくて不安なのか——できるだけ傍にいて、と真希が頼んでからずっとこのスタイルだ。

「もしかして……覗いてた？」

「うん」

「……聞こえた？」

「どっかの若い女子おなが甘い物が食べたいと申ししていたな」

「うわーん！　恥ずかしい！　忘れてよー！」

まるで火山が噴火したかのごとく真希の顔が真っ赤に染まる。そしてポカポカという効果音が付きそうな感じで、軽く俺を叩いてきた。うゝむ、かわいい。

「悪い悪い。ほれ、ちょうど甘いもん買ってきたから、これで許してくれ」

「……何を買ってきたの？」

「やつすいモンブラン」

「ホントに！？　ありがとう！　大好きー！」

と今度は満面の笑顔にスイッチ。現金なやつだ。

「まったく、ちよつと待つてな。今、テーブルとか準備するから」

ベッドで食事する為の折りたたみ机を広げてお茶会の準備をする。部屋に何枚か備蓄されている皿の上にモンブランを乗つけて、自販機で買ったペットボトルのホット紅茶を添える。

「というわけで、全体的に経費を抑えて質素に固めてみました。いかがですかお嬢様」

「うむ！ 苦しゅうないぞ」

何故か胸をエツヘンとばかりに張って威張る真希。というか——いかがですかお嬢様、という俺の言葉に対して殿様言葉で返すのはいかなものだろうか。とりあえずモンブランをフォークで少し削って乗せる。

「ほれ、口開けろ」

「えっ？」

「……まだ、フォークで食べるの慣れてないんだろ？」

「う、うん！ 食べる！ あゝん」

と言って小さい口をそれなりに開ける真希。そこにモンブランのフォークを優しく丁寧に入れる。うーむ、恥ずかしい。

「うゝん！ 美味しい！」

そして満面の笑顔が目の前に。安いモンブランでこんなに喜べるなら、お菓子の国に行ったら悶絶して絶命するんじゃないかコイツは、という意味不明な心配が脳裏によぎる。

まあ、目の前のまばゆい顔も幸せそうだなによりだ。

「お前、本当に美味しそうに物食べるのな」

「えへへ、甘いものなら大歓迎だよ。ありがとね。あゝん」

もう一口よこせ、とばかりにまた口を開けてくる。少し恥ずかしいので、

「……そうだ、フォークで食べる練習でもしてみるか？」

と、はぐらかした。

「えゝ」

「ほら、俺がいない時に物を食べられないと困るだろ。一応練習し

ようぜ」

まだ視力が低下した生活に慣れていない真希は、食事の際も『あゝん』スタイルを崩していない。看護婦さんに毎日食べさせてもらっているとは、何ともうらやま……違う違う。

ともかく、いつまでもこの生活を続けるわけにもいかないだろう。

「ほれ」

俺の持っているフォークを手渡しする。

「んゝ。じゃあさ、そっちも目をつぶってよ」

「……はい？」

「んゝと、お互いの立場を入れ替えてみるのも良いんじゃないかなゝってさ」

「つまり？」

「今度は私が食べさせてあげるってことだよ」

「恥ずかしいから却下」

「えゝ、なんで？」

そのままブーブーと文句を言う真希。とりあえず俺も三分ほど抵抗してみたものの、一向に真希が諦める気配がないので、仕方なく目をつぶってみる。……だが怖い。

「……頼むから変なところを突くんじゃないぞ」

「大丈夫だつてゝ。全く見えてないわけじゃないんだしさゝ」

と言ったところで説得力があるはずも無し。なにしろ手に持っているのは間違いなく銀色の凶器。絶命とまではいかないが、刺されば間違いなく痛いだろう。怖い。

「はい、あゝん」

「……あゝん」

俺は覚悟を決めた。

しかし、意外（？）にもフォークが俺の顔にクレーターを作ることもなく、口にしっかり食物が入ってきた。口に広がる甘さ、苦味、それが熱で徐々に口の中で溶けていく感触。

うん、美味しい。そして、一口噛むごとにカリポリとしたクランキ

「な齒応えと音が口に響く。何という齒応えのあるモンブラ……ン！？」

「ん！？ な、なんだこれ」

俺はビツクリして目を開けてしまった。確かに口の中の物は甘いのだが、明らかにモンブランの売りであるフンワリした口当たりではない。モンブランの上に乗っていた丸ごとの栗かとも思ったが、それでもこんなクランキーな音はしない。というか真希はフオークすら持っていなかった。その手に持っていたのは……。

「チョコレート……？」

「当たり前！ どう、美味しい？」

少し形のいびつなチョコレートが真紀の細い指につままれていた。もう一度、舌で確かめてみる。確かに口に入っているのはチョコレートだ。味も悪くない。

「……で、何なんだこれは」

「あれ？ 今日は何の日だったか覚えてない？」

「……バレンタインか」

「忘れてたの？」

「どうせ貰える相手もないし、記憶から消し去っていた」

もちろんバレンタインについてスツカリ忘れていたわけじゃない。というかスーパ―にもバレンタイングッズが山のように積まれていたし、学校でも男子が妙なテンションになっているのだから忘れたくても無理な話。だから俺は目をそらしていた。チョコを貰えそうな相手で計算が立つのは真希ぐらいしかいなかったし、その真希も入院中。しかも視力が落ちている。だから今年は諦め半分というか何とも言えない気持ちでイベントから目を背けていたのだ。しかし、
「えへへ」。渡しやすいキツカケができて良かった。ハイ」

真希は俺にチョコレートを渡してきた。手作り感満載のラッピン
グされた袋。中には少し欠けたりしている不揃いなチョコレート。
味はともかく、明らかに市販品じゃない。

「これ、どうやって？」

「実は看護婦さんに手伝ってもらって作ってたんだよ。って言うても七割ぐらい看護婦さんが作っちゃったし、形も悪いんだけどね。ゴメンね」

舌を出してテヘツと笑う女の子。俺は真希を抱きしめた。

「きやつ」

「ありがとう。けどな……」

「なに？」

「……次は看護婦さんじゃなくて、俺を呼んでくれないか」

「えゝ、それじゃ彼氏さんへの秘密のプレゼントにならないじゃないかい」

「それもそうだけどさ。けど俺は彼氏である以前に……」

「以前に？」

「……お前の目と手足だから。どんな事情であれ、看護婦さんにその役割奪われたくない」

「ふふつ、ありがとう」

そう言うって真希はキスをしてきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3252r/>

暗がりバレンタイン

2011年3月5日00時40分発行